



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第二十主日A年（2026年8月16日）

第一朗読：イザヤ書 56 章 1、6－7 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 11 章 13－15、22－32 節

福音朗読：マタイによる福音書 15 章 21－28 節

三つの朗読から

三つの朗読に共通するのは、第一に「異邦人」です。異邦人とはイスラエルの神を信じていない人のことです。福音書に登場する「カナンの女」（マタ 15 章 22 節）は、神の救いの手からもれた異邦人の代表格です。しかし、第一朗読にあるように、その異邦人が、神さまから受け入れられます。こうして神さまがおられる神殿は「すべての民の祈りの家」（イザ 56 章 7 節）となっていきます。第二朗読では、逆にパウロが自分は「異邦人のための使徒」（ロマ 11 章 13 節）であると宣言します。だから、異邦人が救われているのを見て、同胞であるユダヤ人も「ねたみ」（14 節）を起こして、神の救いの手の中に入ってほしいと願っているのです。

さらに三つの朗読に共通する第二の点は、神の救いの想い、救いの計画です。第一朗読ではイスラエルの民が救われて、続いて異邦人が救われていきます。第二朗読では逆に異邦人が救われて、それによってユダヤ人も救われていきます。いずれも神さまの救いの計画によるものです。福音では一見するとイエスさまの女性への対応は冷ややかなようにも見えます。それは、イエスさまは「イスラエルの家の失われた羊」（マタ 15 章 24 節）のために働くのが自分の使命だと理解しているからです。それでも、「カナンの女」は、神の救いの想い、計画は異邦人にも向かっているのだと確信をもって主張します。そんな女性の信仰にイエスさまのこころは動いたのです。すべての人は、神の救いの想い、計画の元にあるのです。

福音朗読の 26 節と 27 節に注目してください。26 節に「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とあります。「犬」はギリシア語でキューオンといいますが、異邦人を指す言葉だったようです。「神聖なものを犬に与えればならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう」（7 章 6 節）。イスラエルの人たちが異邦人に対して侮辱を込めて使った言葉だったのでしょ

ここでは「小犬」（キュナリオン）となっています。文字どおりの小さな犬だけではなく家の中で飼われる小型犬を意味しているのかも知れません。「パン」は神さまからの救いの祝福を象徴します。イエスさまは「賛美の祈りを唱えて」（１４章１９節）、すなわち祝福の祈りを唱えてパンを増やしました。

そして、２７節の「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」を見てみましょう。この女性にはイエスさまに近づくためのさまざまなハードルがありました。女性であるということ。カナンというイスラエルから見ると異邦人であること。その異邦人が「主よ、ダビデの子よ」（２２節）と叫ばずにはいられないほど切羽詰まっていること。

さらに、イエスさまはこの女性に更なるハードル、すなわち信仰の試練を与えます。最初の試練は沈黙です。「しかし、イエスは何もお答えにならなかった」（２３節）。二番目の試練は弟子たちの無理解からくる言葉です。「この女を追い払ってください」（２３節）。そして、三番目の試練はイエスさまの言葉です。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」（２４節）。拒絶の言葉に対して女性はひれ伏して叫びます（２５節参照）。第四の試練は侮蔑的な意味にも取れるイエスさまの言葉です。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」（２６節）。

そんな試練の数々を経ながら、女性の機知に富んだ言葉が彼女のこころを表します。なぜなら、この女性は自分を「小犬」になぞらえたのです。そればかりか、敵対する民族であるイスラエルの民を「主人」とみなしたのです。神の救いがイスラエルの民を通じて、異邦人にも与えられるということを知っていたのでしょうか？ また、自分自身を「小犬」とみなして、神の前でへりくだったのでしょうか？ おそらく、神さまが、ご自分が神さまであろうとするためにイスラエルの民を救われるのだとしたら、異邦人に対しても神さまが神さまであろうとすることを示すに違いないという信仰があったのでしょうか。

イエスさまは、この女性の言葉にこころ打たれていきます。「あなたの信仰は立派だ」は「あなたの信仰は偉大だ」という意味です。女性は、神さまの救いの想いというものをしっかりと捉えていたのです。

実は、イエスさま自身も信仰の試練に直面していたのかもしれません。イスラエルの人々の間に信仰を見出せなかったからです。ティルスやシドンに向かったのは「信じて生きてる」人を見つける旅だったのでしょうか。異邦人世界に本当に信仰があるのかを試さなければなりませんでした。その点で信仰についての試練といえるでしょう。